

東南アジアの美術教育カリキュラムにおける創造性の育成

シンガポール, マレーシア, インドネシアを事例として

佐々木 宰・福田 隆真*

北海道教育大学教育学部釧路校

*山口大学

Development of Creativity in Curricula of Art Education in South-East Asia

: Cases of Singapore, Malaysia and Indonesia

SASAKI Tsukasa and FUKUDA Takamasa*

Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

*Yamaguchi University

北海道教育大学紀要（教育科学編）

第 72 卷 第 1 号 別 刷

令和 3 年 8 月

東南アジアの美術教育カリキュラムにおける創造性の育成

シンガポール, マレーシア, インドネシアを事例として

佐々木 宰・福田 隆真*

北海道教育大学教育学部釧路校

*山口大学

Development of Creativity in Curricula of Art Education in South-East Asia

: Cases of Singapore, Malaysia and Indonesia

SASAKI Tsukasa and FUKUDA Takamasa*

Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

*Yamaguchi University

概 要

東南アジア諸国の美術教育カリキュラムにおいて、創造性の育成がどのように取り扱われているかを、シンガポール、マレーシア、インドネシアを事例として調査した。いずれの国も、1990年代後半からの教育改革において21世紀型の能力開発が標榜されており、美術教育カリキュラムには、「創造性とイノベーション」、「批判的・創造的思考」といった主旨での資質形成が共通性として確認された。他方、こうした資質・能力を生かす社会的な文脈のとらえ方には、国によって相違が認められた。知識基盤社会における人的資源開発、多民族・多文化社会における新しいアイデンティティ創出といった観点をもつシンガポールに対して、信仰に基づく精神的・社会的な態度形成と知識・技能獲得の総合的な資質形成の中でとらえようとするインドネシアは対比的であり、マレーシアはこれらの中間的な位置にあった。

はじめに

アジア諸国における美術教育の実施状況は多様であるが、おおむね初等教育及び前期中等教育の教科として位置づけられている。日本の学習指導要領のように、教科目標や内容を示した教科ごとのカリキュラムをもつ国もあれば、学校教育全体のカリキュラムの中に教科の方針が大綱的に示されている場合もある。また、美術教育が独立した教科としてではなく、音楽や舞踊などを含んだ芸術教科や総合的な領域として扱われて

いる場合もある。

したがって、美術教育の目標にもさまざまな違いが現われているものの、美術を通じた造形表現の能力育成、美術文化の理解と伝承、情操の陶冶などの目標は概ね共通しているといえる。さらに、「創造性の育成」も美術教育の目標として頻出する事項であり、目標はもとより美術教育の特徴や性質を表わす言葉としても長く使われてきた。

他方、その「創造性」が何を意味するか、つまり創造性をどのように解釈するかについてはかなりの幅がある。国の違いはもとより、同じ国であっても、時代によって美術教育に求められる創造性育成の内実が異なるからである。筆者の東南アジア諸国における美術教育の実地調査では、美術が手工芸や軽工業とみなされる経済発展途上の状況下では、創造性は実業的な素養として解釈される一方、経済発展を遂げた状況下では、知性や感性と同様に望ましい人間の属性として語られるなど、地域差がしばしば確認されていた¹⁾。

1990年代後半からは、アジアはもとより世界各国で21世紀に向けた教育改革が進められている。1996年のユネスコのハバナ地域会議では、現代世界が提起する問題に対応するためには、一般教育と高等教育が不可欠の役割となることが示された²⁾。1997年からはOECDがDeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プロジェクトを開始して、①相互作用的に道具を用いる力、②異質な集団で交流する力、③自律的に活動するという三つのカテゴリーで構成される「キー・コンピテンシー」を示した。こうした動向の背景には、知識基盤経済への対応という課題意識があった。

1990年代後半からの世界の主要国におけるコンピテンシーに基づく教育改革の動向を、松尾は次の4点にまとめて指摘している³⁾。それは、①コンピテンシーの育成をナショナル・カリキュラムに位置づけて国家戦略として推進している国が多い、②育成する資質・能力は「汎用」「キー」などの形容詞と、「コンピテンシー」「スキル」などの名詞の組合せで表現される、③能力の構成要素は「基礎的リテラシー」「認知スキル」「社会的スキル」で構成される、④コンピテンシー育成の体制は国や地域によって異なる、というものであり、アジアにおいて概ね当てはまる。

東南アジア諸国の政府は、急速な世界経済の発展に対応した人的資源の確保のために、初等教育から高等教育までの充実を政策の重点課題とした。特に開発主義によって経済発展を遂げてきた国々にとっては、次世代の経済戦略と人材育成は重要な政策課題である。教育の情報化や情報リテラシーの育成などが教育課題として急浮上するとともに、グローバル化した知識基盤社会で活躍し、価値を創造できる人間の資質が問われるようになった。そうした資質を、2009年に国際的な研究プロジェクトATC21Sは「21世紀スキル」として提示しているが、各国の教育改革においても同じような呼称で、このスキルに含まれ得る資質・能力が定められていった。

このような趨勢の中で、「創造性とイノベーション」は21世紀スキルの一つとして挙げられている⁴⁾。前述の通り、創造性の育成は従来から美術教育の基本的な目標であったが、現代及び近未来の人間が備えるべき汎用的な資質・能力として改めて示されることで、学校教育における美術教育の位置づけも変わりつつある。美術という限られた領域の能力育成ではなく、広汎な領域で生かされる創造性開発を担う教科としての美術教育が意識されるようになってきた。

そこでの創造性とは、材料や道具を使って思考や感情を表現したり、ものを生み出したりする能力という意味はもとより、生活上の要求や諸現象に対して問題解決を図っていくポジティブな態度を含むと考えられる。つまり、創造性は、表現者や技術者だけではなく、日常の在り方をより豊かなものにしようとする一般生活者にも求められる汎用的な属性として解釈することができるのである。

東南アジア諸国の中では、シンガポールがいち早く知識基盤経済に対応する教育改革に着手し、21世紀スキルを踏まえた美術教育カリキュラム改訂を行っている。隣国のマレーシア、インドネシアもこれに追随し

て美術教育カリキュラムを改訂した。その他の国々においても開始時期や進行状況に差があるが、21世紀スキルとしての創造性を意識した美術教育を、何らかの形でナショナル・カリキュラムに位置付けている。

本稿では、シンガポール、マレーシア、インドネシアの最新の美術教育カリキュラムを取り上げ、創造性育成がどのように示されているのかを明らかにすることを目的とする。これらの国は、植民地統治からの独立後に、開発主義で経済発展を遂げた多民族・多文化国家である。その美術教育は、技能獲得による実業的な意味合いから、自己表現による情操の陶冶、自他の民族の文化理解に至るまで、様々な側面をもっていた。他方、1990年代後半以降は、各国の美術教育の文脈を踏まえつつ、創造性育成が21世紀スキルの一つとして位置づけられている。本稿ではその相違を確認して、アジアの美術教育カリキュラムにおける創造性育成の状況を把握することを試みる。

1. シンガポールの事例

(1) シンガポールの教育改革

シンガポールはイギリスの植民地統治によって交易都市として開発され、それに伴う移民によって国の原型が形成された多民族・多文化国家である。中国系、マレー系、インド系の住民はそれぞれの言語、文化や宗教をもつが、社会制度は旧宗主国の影響を強く受けている。

学校教育は、6年制の小学校（Primary School）、4年制の中学校（下等中学校Lower Secondary Schoolと上等中学校Upper Secondary School）から成る。したがって、日本の小学校、中学校段階にあたる初等及び前期中等教育には、小学校と下等中学校が相当する。

1965年の独立直後は国の存続すら危ぶまれたが、政府の徹底した社会管理と経済政策によって急速な発展を遂げた。現在、国民一人当たりのGDPはアジアで第一位の豊かな国である。天然資源をもたないシンガポールでは人材が唯一の資源とみなされ、教育の充実は重要な政策課題となっている。二言語教育や試験による競争的な複線型学校制度などによって教育の効率化が図られ、国際的な学力調査の上位国になっていることはよく知られている。

1997年頃から21世紀社会に対応した教育改革が推し進められ、知識基盤経済に対応した新たな人材像が模索された。2005年からは「少なく教え、多くを学べ」のスローガンのもとで、より柔軟な教育機会のあり方が指向され、21世紀型スキルの育成を強く意識した教育が求められるようになった⁵⁾。

2018年からは、従来の教育改革の基本路線を継承しつつ、「人生のために学べ」をスローガンに、競争主義・能力主義からの脱却をはかる大胆な改革が開始された⁶⁾。中でも、シンガポールの学校制度の特色であり、能力主義の象徴でもあった中学校のコース制（ストリーミング）の廃止は、現在、パイロットスクールで実施中であり、大きな注目を集めている。さらに試験の成績による評価の負荷を大幅に軽減し、学ぶ主体としての生徒に主眼を置いた教育への移行が進められている。

ストリーミングによって特徴づけられていた学校制度下では、試験の成績はその後の教育機会や人生を左右するだけに、子どもと親の最大の関心事であった。政府にとっては、ストリーミングは効率的に人的資源を開発し、再配分する社会的な仕組みであった。過重な試験勉強が子どもや親の大きな負担になっていることは広く認識されながらも、ストリーミングは形を変えて40年近く続けられてきた。したがって、この制度の完全な撤廃は、これまで試験で測定してきた資質・能力観からの抜本的な方針転換を意味する。

このような教育改革の背景にあるのが21世紀型スキルであり、シンガポールでは「21世紀コンピテンシー」と称して次図のような初等・中等教育共通の能力概念が示されている⁷⁾（図1参照）。図の中央には、尊敬、責任、ねばり強さ、誠実、思いやり、協調といった個人の属性が「中心的価値」として示され、その外周には、自己意識、自己マネジメント、社会的意識、関係性マネジメント、責任ある意思決定といった「社会的・

情緒的コンピテンシー」が示されている。さらにその外側には、コミュニケーション、コラボレーションと情報スキル、市民リテラシー、グローバル意識と異文化スキル、批判的・革新的思考といったスキルが「グローバル社会で生き抜くためのコンピテンシー」として示されている。

こうした図の構造から、個人の属性を社会的な文脈においてどう生かすかという観点で21世紀の資質・能力がとらえられていることがわかる。すなわち、個人の価値観の形成を通して、自分の属性を地域社会や国、グローバルな社会で生かしていく資質・能力が21世紀型スキルであり、その育成が学校教育に求められているといえる。さらに、その期待される教育の成果は、「自信を持った個人」、「自主的な学習者」、「積極的な参加者」、「思いやりのある市民」という具体的な人間像として提示されている。

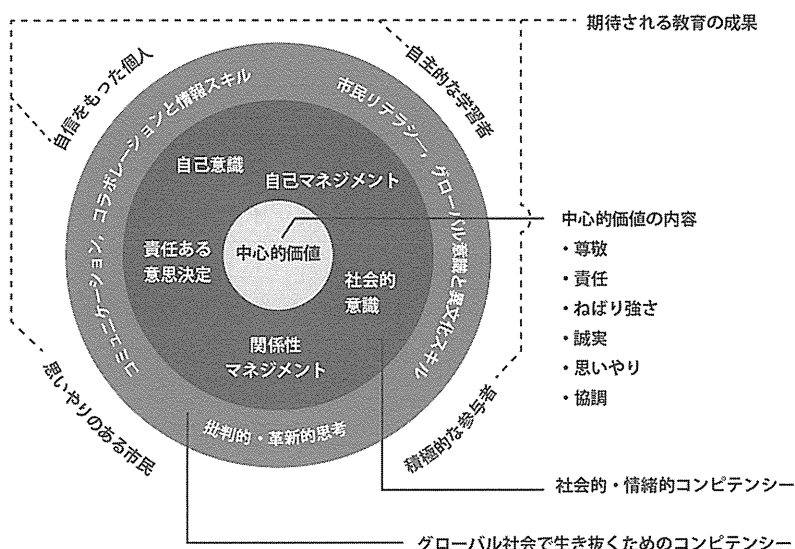


図1 シンガポールの初等中等教育における21世紀コンピテンシーの概念図

(2) シンガポールの美術教育カリキュラムと創造性

シンガポールの各教科のナショナル・カリキュラムは、「シラバス」という文書として公示されている。教科の目標や指導事項、評価規準、指導計画立案の留意点などが示されており、日本の学習指導要領の形式に類似しているが、その改訂の時期は学校種や教科によって異なっている。現行の美術シラバスは、小学校、中学校（下等中学校）ともに2018年から実施されているものである。

これらのシラバスによれば、21世紀における美術は、「絵を上手に描く技術や、日常から少し離れた品の良い趣味や教養などではなく、人間の生活に深く関与し、思考や感情、価値観に深く関与する表現のモード」として捉えられている⁸⁾。美術の学習を単なる描写技術の問題や、教養としての知識の問題から切り離し、思考や感情をもった人間の表現に関わる活動として捉えていることがわかる。すなわち、生きる上で不可欠となる表現として美術がとらえられている。

美術の教科目標は小学校と中学校で共通しており、①美術を楽しむ、②視覚的にコミュニケーションをとる、③社会や文化との関わりから意味をつくる、とされている。さらに、美術の価値については、①社会における生徒のアイデンティティ保持や文化意識を涵養する、②21世紀の批判的認識能力や視覚的なコミュニケーションのスキル、③想像力と創造性を拡張するもの、と示されている。また、シラバスでは「美術の大概念」が、①新しいものの見方を促す、②生き方に影響を与える、③私たちの世界を物語る、といった3側面で示されている。

これらのことから、美術の学習の目的は、個別の表現技法や知識の習得よりも、視覚的な表現の経験を基

にして、視覚的なりテラシーやコミュニケーション能力を獲得させ、社会や文化との関わりのなかで視覚的なコミュニケーションの意味や価値を創造していくこと、と読み取ることができる。したがって、例えば絵画や彫刻、工作といった表現形式は、こうした目的達成のための美術のメディアの一つであり、それ自体に固有の学習内容があるわけではない。学習内容はむしろ、こうしたメディアが学習の媒体として意味をもつ文脈、美術活動のプロセス、そこで扱われる視覚的な要素の質との関係において導き出される相対的なものであるとするのが、この美術カリキュラムの特徴である。

シラバスにおける美術の学習領域は、「表現（中学校ではコミュニケーション）」「見る（中学校では知覚）」「鑑賞」の3領域が設定されており、それぞれに対応するコンピテンシーが次表のように設定されている（表1参照）。

表1 シンガポールの美術シラバスの学習領域とコンピテンシー

学習領域（小学校）	学習領域（中学校）	対応するコンピテンシー
表現	コミュニケーション	創造する・革新する
見る	知覚	観察する・調査する
鑑賞	鑑賞	つながる・反応する

表を見ると、表現（中学校では「コミュニケーション」）の学習領域に対して、「創造する・革新する」というコンピテンシーが設定されていることがわかる。これはもちろん、造形的な表現活動やコミュニケーションによって作品や新しい表現を創造する能力育成が期待されていることを意味する。

このように、シンガポールの美術シラバスにおける創造性の育成は、狭義には造形的な表現活動や、革新性を伴った表現物としての作品やものを生み出すこと、として捉えられていることがわかる。他方、学校教育全体にわたって21世紀コンピテンシーの育成を目指してきた一連の教育改革の流れを踏まえるならば、美術教育に期待される創造性の育成はより広義にとらえられよう。すなわち、創造性は、新しいものの見方による知覚を基にイメージし、生活空間や社会における視覚的な事象を意味づけるとともに、自分自身の文化的アイデンティティを実感しながら世界と繋がっていかうとするポジティブな態度、としてとらえられているといえる。

シンガポールでは、中国、マレー、インドなどの民族ごとの文化はあっても、「シンガポール」としての文化と言えるものがなかった。政府は1990年代から芸術文化振興政策に積極的に投資し始め、文化施設の新設や大型改修、国際的な芸術祭の開催、芸術教育支援策などを展開した。特に1999年から開始されたルネッサンス・シティ計画では、芸術文化産業立国を目指しながら、芸術文化を通して国民的アイデンティティを創出することが試みられて現在に至っている⁹⁾。こうした背景を踏まえると、美術教育を通して育成が期待される創造性は、個人に帰する一般的資質であるとともに、芸術文化産業における高付加価値をもった人的資質でもあると解釈できる。さらに、創造性は、こうした政策を通して新しい国民文化や国民的アイデンティティ形成に寄与する資質としても期待されているといえる。

2. マレーシアの事例

(1) マレーシアの教育改革

マレーシアは旧イギリス植民地としての歴史をシンガポールと共有しており、マレー系、中国系、インド系住民からなる多民族・多文化国家である。人口構成比ではマレー系が多数派となっているが、経済的な優位性は中国系住民にあるため、プミプトラ（土地の子）と呼ばれるマレー人優遇政策が採られている。シン

ガポールが実質的な華人社会でありながら、制度的に民族平等を維持しているのに対して、マレーシアではマレー系を優遇することで経済や教育機会の均衡を図ろうとしている。

マレーシアの学校教育は、6年制の小学校 (Sekolah Rendah)、5年制の中学校 (Sekolah Menengah) からなり、中学校は前期3年と後期2年から構成されている。初等教育と前期中等教育は、小学校6年間と中学校の3年間に相当する。教育目標や内容の大綱は、ナショナル・カリキュラムによって示されている。

マレーシアでは近年の教育改革によって、小学校と中学校のカリキュラムがそれぞれ改訂され、2017年から実施されている。小学校標準カリキュラム (Kurikulum Standard Sekolah Rendah) はKSSR、中学校標準カリキュラム (Kurikulum Standard Sekolah Menengah) はKSSMという略称が用いられている。

カリキュラム改訂の主たるねらいは、21世紀型の資質・能力の開発である。考える技術、プロジェクト型の学習課題、ICTへの対応、問題解決、創造力、イノベーションなどの重点化が示されている。マレーシアの教育改革は、長期的な教育政策計画である「マレーシア教育ブループリント2013-2025¹⁰⁾」に示されており、今次のカリキュラムの改訂もこの方針に沿ったものである。

もともと、マレーシア教育ブループリントは、2006年に2010年までの抜本的な教育施策として示されていた。その後、ユネスコ、世界銀行、経済協力開発機構や大学の専門家、教師や保護者、生徒たちからの意見を踏まえ、2013年から2025年までの13年間の教育政策を示した新版のブループリントが策定され、現在に至っている。このブループリントでは、マレーシアの教育制度が目指している5つの目標と、グローバルな競争のために全生徒に必要なとなる6つの要素が簡潔に示されており、ここから教育改革の方針を理解することができる。

5つの目標とは、①就学前から後期中等教育までの就学率100%を2020年までに実現する「アクセス」、②15年以内にPISAやTIMSSなどの国際調査での上位3位を目指す「クオリティ」、③地域や経済力などによる学力格差を2020年までに半減する「平等」、④多様性を受け入れて価値観や経験を共有する「ユニティ」、⑤予算の中で生徒の達成度を最大化する「効率」である。

また、生徒に必要なとされる6つの要素とは、①理数はもとよりマレーシア・アジア・世界の歴史や人々、地理に加え、美術や音楽、スポーツに発展していく「知識」、②知識をつなげたり新しい知識を生みだそうとしたりする「考えるスキル」、③他者との協調のもとに能力を引き出す「リーダーシップ・スキル」、④国語であるマレー語と英語の「二か国語の習熟」、⑤コミュニティの人間関係に寄与する「倫理観と精神性」、⑥民族や宗教を超えた共同意識である「ナショナル・アイデンティティ」である。

このように、ブループリントからは、グローバル経済が国勢を左右する21世紀の人材開発に対する強い姿勢が伝わってくる。PISAやTIMSSにおける上位進出を目標にかかげ、自国の教育を国際的な水準に押し上げようとする一方、広い国土と多民族社会に由来する地域格差や経済格差などの国内問題への対応にも迫られている事情がうかがえる。生徒に求める6つの要素からわかるように、教育による人材開発は、主知主義的な価値観ではなく、知識を応用・発展して新しい生み出す創造的な価値観を基盤にしており、マレーシアの国内事情を踏まえた21世紀型スキルが設定されている。

こうした方針を反映して、小学校及び中学校標準カリキュラムでは、「批判的・創造的思考」と「革新性」を備えた「バランスの取れた人間」を中核に据え、これを①コミュニケーション、②精神性・態度・価値観、③人間性、④自立心、⑤身体の発達と審美観、⑥科学と技術、という6つの側面から達成しようとするカリキュラムの枠組みが示されている。前述のブループリントで示された6つの要素と完全一致ではないものの、その主旨をくみ取り、カリキュラム構造の中に位置づけていることがわかる。

小学校標準カリキュラムでは、カリキュラムの枠組みは図2のように表されている (図2参照)¹¹⁾。基本的な構造は中学校標準カリキュラムにも採用されており、違いは6つの柱の中に示される細目が若干増えて

いる程度である。したがって、このカリキュラム構造は、マレーシアの初等中等教育を貫く教育理念を表わしており、期待される人間像の重要な属性の一つとして、創造的思考が求められているといえる。

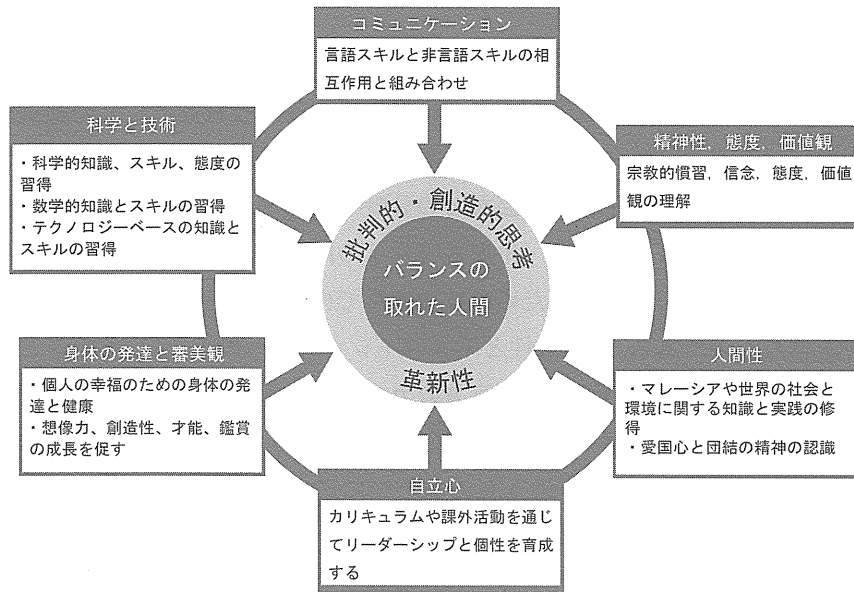


図2 マレーシアの小学校標準カリキュラムの枠組みと6つの柱

(2) マレーシアの美術教育カリキュラム

マレーシアの小学校及び中学校における美術教育は、小学校、中学校では視覚芸術 (Seni Visual) という教科として実施されている。

前述の通り、マレーシアのカリキュラム改訂は2017年から順次行われており、視覚芸術のカリキュラム改訂も進められてきた。小学校のカリキュラムの目標は、「KSSR小学校視覚芸術は、調和のとれた、批判的で、創造的で革新的な人間の育成、豊かな価値観の実践、さまざまな文化の美の鑑賞、神の創造物である自然の美の鑑賞において、視覚芸術の分野に精通し、習熟した生徒を育成することを目的としている¹²⁾」と示されている。その上で、小学校の視覚芸術の一般的目的として、以下の5項目が示されている。

1. 視覚芸術の言語を知り、理解し、解釈する。
2. 様々な材料や技法を使って、創造的で革新的に視覚芸術作品を作り出す。
3. さまざまな視覚芸術作品の美的価値を味わう。
4. 視覚芸術の展示を成功させるために、視覚芸術の知識と技能を応用する。
5. 視覚芸術の活動を通じて価値ある実践をする。

また、中学校のカリキュラムの目標は、「視覚芸術の知識と技能をもち、自分自身、社会、経済の発展に貢献する美的価値を認識できる人になるように、生徒の可能性を構築すること」と示されている。その上で、中学校の視覚芸術教育の一般的目的として、以下の8項目が示されている¹³⁾。

1. 神の創造物である自然の美しさを理解する。
2. 視覚芸術、美術、デザイン、工芸、視覚コミュニケーションの歴史と鑑賞の分野を説明する。
3. 視覚芸術、美術、デザイン、工芸、視覚コミュニケーションの歴史と鑑賞の分野を解釈する。
4. 視覚芸術の作家やマレーシアの工芸の作品の価値を位置づける。
5. 作品や美術製品のメディア、プロセス、技法の使用を通じて、視覚芸術の様々な分野の知識と理解を適用する。

6. 作品や美術製品の制作におけるメディア, プロセス, 技法の探究を通じて, 実験の結果を分析, 操作する。
7. 作品や美術製品の制作における視覚芸術思考の側面に焦点を当て, 創造的かつ革新的にアイデアを提示する。
8. 視覚芸術の言語に基づいて作品や美術製品を鑑賞する。

これらの教科目標を見ると, 小学校では子ども自身に帰する一般的な資質としての創造的な人間像が意識されているが, 中学校では産業や経済発展に寄与できる資質としての創造性が, イノベーションと同時に強く意識されていることがわかる。デザインや工芸などの分野や製品・商品としての「美術製品」に関する記述からは, 例えば産業デザインのような製造・生産と美術との関連を読み取ることができる。ただし, 産業や経済と美術教育との関わりは, ものを作るための技能習得ではなく, むしろ知識基盤社会に対応したアイデアやソフトウェアを含むものである。「創造性とイノベーション」への言及は, そのことを示唆している。

「創造性とイノベーション」は, 小学校, 中学校双方のカリキュラムの様々な箇所に散見される。例えば, 小学校のカリキュラムを構成する「言語モジュール」「技能モジュール」「創造性とイノベーションモジュール」「鑑賞モジュール」の4つのモジュールのうちのひとつに当てられている。つまり, 視覚芸術の学習における言語と知識, 多様な表現活動を通じた技能, 鑑賞活動などと同様に, これらの学習を踏まえて新しいアイデアを生み出す創造性や革新性に関する学習内容が設定されているのである。このことから, 創造性は, 言語を通して得られた知識, 表現を通して得られた技能, 鑑賞を通して得られた理解を総合して, 革新性をもった発想を志向する総合的な資質として捉えられているといえる。

また, 中学校のカリキュラムでは, 問題を解決しながら価値観を形成していくため「高レベルの思考スキル」として, 「批判的思考スキル」, 「推論スキル」とともに「創造的思考スキル」が設定されている。創造的思考スキルは, 「想像力を使うだけでなく, 通常とは異なる思考によって, 新しく価値あるものを生み出したり作りだしたりする能力」と定義されている。合理性や論理性に基づく批判的思考や推論のスキルとともに, 想像することはもとより通常とは違う視点や発想に基づく「創造的な思考」が高レベルの思考スキルとして設定されていることが興味深い。

このように, マレーシアの美術教育カリキュラムにおける創造性の育成は, 表現活動を通じた技能的な側面ばかりではなく, 鑑賞活動や知識をも踏まえて新しいものを生み出そうとする総合的な資質形成として考えられている。また, 論理性, 合理性とは別の次元で新たなアイデアを導く思考スキルとして「創造的な思考」が想定されていることから, 既存の常識にとらわれない発想や構想の資質形成が期待されているといえる。

3. インドネシアの事例

(1) インドネシアの教育改革

インドネシアはインド洋から太平洋にかけて約5000kmにわたる島嶼からなり, その国土面積は世界で4番目, 人口は約2億5千万であり, ASEAN最大規模の国である。広範な地域には多様な民族が暮らしており, 住民構成は, ジャワ系(40%)とスンダ系(16%)で約半数を占めるが, 残る半数は多数の民族で構成されている。住民の9割近くがイスラム教を信仰しており, 世界最大級のイスラム国家でもある。

天然資源の豊富なこの地域には, 16世紀以降ヨーロッパ諸国が進出するが, 19世紀以降はオランダの植民地として統治された。植民地からの独立の過程で統一体としての「インドネシア」という概念が形成され, 独立後も「多様性の中の統一」を目指す多民族・多文化国家となった。

経済規模は大きい, 経済の地域格差は大きく, 都市と地方の教育の格差にもつながっている。グローバ

ル経済への対応に伴って人的資源への投資が必須となり、教育の地域格差の解消とともに21世紀に対応した資質・能力の開発が教育に求められていた。

インドネシアの初等教育は小学校 (Sekolah Dasar)、前期中等教育は中学校 (Sekolah Menengah Pertama) が担っている。これらは教育文化省が管轄する公立学校 (約84%) であるが、この他に宗教省が管轄するイスラム学校 (約16%) もある¹⁴⁾。

今日につながる教育改革の端緒は、2003年の国家教育制度に関する法律第20号によって、教育の役割や目的を再定義したことによる。2004年施行された初等及び中等教育のカリキュラムは、「コンピテンシーを基盤としたカリキュラム (Kurikulum Berbasis Kompetensi)」として、その後のカリキュラムの基本方針を方向づけた¹⁵⁾。2003年当時は、OECDが「キー・コンピテンシー」を発表して、新しい時代に求められる資質・能力という観点から教育のあり方が各国において問われていた時期である。インドネシアのコンピテンシーを基盤としたカリキュラムも、こうした趨勢を踏まえたものであったと考えられる。このカリキュラムは2006年、2013年と改訂されていく。

古内らによれば、2013年に改訂されたカリキュラムの目的は、生徒たちが「個人かつ国民として信心深く、革新的で生産力・創造力・効率性に優れ、かつ社会・国民・国家・国際社会に貢献できる人間になるよう備えること」であり、「創造性、自律性、協調性、連帯、リーダーシップ、共感力、寛容さ、生活能力」といった資質の開発にあるという¹⁶⁾。

このカリキュラムでは、コンピテンシーを基盤とした従前からの方針を継承し、「コアコンピテンシー」、「基本コンピテンシー」のふたつに分けて資質・能力を示した。

これを基本的な枠組みとして、2016年にコアコンピテンシーと基本コンピテンシーに関する教育文化省規則が加えられ、さらに2018年に規則改正が加えられたものが、現在のカリキュラムである¹⁷⁾。2018年の改正の要点は、デジタル時代のスキルに対する生徒のニーズを満たすため、初等及び中等教育のカリキュラムに情報教育に関する内容を加えたことである。具体的には、情報教育の内容は、小学校では学習のツールと、課外活動や地域活動を通じた形で設定され、中学校や高等学校では情報教科のコアコンピテンシーと基本コンピテンシーとして設定された、ということである。

インドネシアの初等中等教育カリキュラムの目標 (目的) には、以下の4つのコアコンピテンシーの育成が含まれる。

- (1) 精神的な態度
- (2) 社会的な態度
- (3) 知識
- (4) 技能

このうち、「精神的な態度」と「社会的な態度」はそれぞれの学校段階において全教科に共通する生徒の態度形成に関わる目標として示されている。

例えば、精神的な態度のコアコンピテンシーでは、小学校・中学校ともに「信仰する宗教の教えを尊重し、実践すること」という主旨が示され、宗教を尊重する態度形成が求められている。インドネシアでは宗教の選択は自由だが、唯一神への信仰は国是五原則 (パンチャシラ) の第1項に挙げられており、無神論は認められない。したがって、学校教育における精神的な態度形成に信仰が重要な役目を果たす。

社会的な態度のコアコンピテンシーについては、小学校では「家族、友人、教師との交流において、正直な行動、規律、責任、礼儀、ケア、自信を示すこと」と示され、中学校では「社会と自然環境との効果的な相互作用において、正直な行動、規律、責任、ケア (寛容、相互協力)、礼儀、自信を示すこと」と示されている。いずれも、身のまわりの人々や事象、環境とのより良い関係を維持するための態度形成に言及して

いることがわかる。これらは社会生活を営む上で必要となる一般的な資質ではあるが、「多様性の中の統一」を維持する多民族国家というインドネシアの社会的背景を考えると、その重要性の高さが理解できよう。

このように信仰を通じた精神的態度、周囲の環境との関わりを通じた社会的態度の形成は、直接的な指導ではなく、科目の特性や生徒の実態に応じて、「模範、習慣、学校文化を通じた間接的な教育」によって達成すべきものとされている。

「知識」と「技能」のコアコンピテンシーについては、各教科の中での形成が求められており、教科別のカリキュラムの中で示されている。さらに、「知識」と「技能」のコアコンピテンシーは、各教科において学年ごとに示され、さらにそれぞれについてより具体的な基本コンピテンシーが設定されている。

カリキュラムの記述の体裁も、「精神的な態度」と「社会的な態度」のコンピテンシーが、日本の学習指導要領でいう「総則」のようなものとして述べられ、その後教科ごとに「知識」と「技能」のコンピテンシーに関する記述が続く。したがって、教科レベルでのカリキュラム改訂は、「知識」及び「技能」についてのコアコンピテンシーとそれに付随する基本コンピテンシーに反映されているといえる。

(2) インドネシアの美術教育カリキュラム

インドネシアの初等及び前期中等教育における美術教育は、小学校の「芸術文化と工芸 (Seni Budaya dan Prakarya)」, 中学校の「芸術文化 (Seni Budaya)」の教科の中で行われている。

「芸術文化 (Seni Budaya)」には、美術 (Seni Rupa), 音楽 (Seni Musik), 舞踊 (Seni Tari) などが内容として含まれている。小学校の「芸術文化と工芸」は、美術、音楽、舞踊の他に、工芸 (Prakarya) を含む教科である。また、中学校の「芸術文化」には、美術、音楽、舞踊に加えて演劇 (Seni Teater) が内容として設定されている。したがって、インドネシアでは小学校での「芸術文化と工芸」及び中学校での「芸術文化」という教科の一つの科目または領域として美術教育が実施されている。

インドネシアのカリキュラムでは前述の通り、4つのコアコンピテンシーのうち、「精神的な態度」と「社会的な態度」のコアコンピテンシーについては、小学校、中学校それぞれで全教科共通のものとなっている。そのため、教科による違いが生じるのは、「知識」と「技能」のコアコンピテンシーである。

この知識と技能のコアコンピテンシーは、小学校では2学年毎にそれぞれ設定されており、さらに各学年別に、美術、音楽、舞踊、工芸に対応した4つの基本コンピテンシーが設定されている。これらをまとめると、次表のようになる (表2参照)¹⁸⁾。

表2 インドネシアの小学校「芸術文化と工芸」におけるコアコンピテンシーと美術・工芸の基本コンピテンシー

	コアコンピテンシー3 (知識)	コアコンピテンシー4 (技能)
小学 1・2年	3. 自分自身, 神の創造物, 家や学校で見つけた物について好奇心をもち, 観察 (聞く, 見る, 読む) し, 質問することで物事の知識を身につける。	4. 明確で論理的な言葉, 美しい作品, 子どもの健康的な活動, 誠実で高貴な行動で物事の知識を表す。
	基本コンピテンシー	基本コンピテンシー
小学1年	3. 1 平面及び立体の表現を知る。 3. 4 制作における自然の素材を知る。	4. 1 平面及び立体の作品を作る。 4. 4 自然の材料で作品を作る。
小学2年	3. 1 平面及び立体の想像による作品を知る。 3. 4 自然及び人工の材料の扱いを作りながら知る。	4. 1 想像して平面及び立体の作品を作る。 4. 4 自然及び人工の材料から装飾を作る。

	コアコンピテンシー 3 (知識)	コアコンピテンシー 4 (技能)
小学 3・4年	3. 自分自身、神の創造物とその活動、家や学校で見つけた物について好奇心をもち、観察（聞く、見る、読む）し、質問することで物事の知識を身につける。	4. 明確で体系的かつ論理的な言葉、美しい作品、子どもの健康的な活動、誠実で高貴な行動で物事の知識を表す。
	基本コンピテンシー	基本コンピテンシー
小学3年	3. 1 装飾作品の形の要素を知る	4. 1 装飾作品を作る。
	3. 4 切る、折る、接着する技術を知る。	4. 4 切る、折る、接着する技術を使った作品を作る。
小学4年	3. 1 立体を表した絵や形を知る。	4. 1 立体を描画して表す。
	3. 4 貼り付け技法の芸術作品を知る。	4. 4 コラージュ、モンタージュ、アップリケ、モザイク作品を作る。

	コアコンピテンシー 3 (知識)	コアコンピテンシー 4 (技能)
小学 5・6年	3. 自分自身、神の創造物とその活動、家や学校、遊びで見つけた物について好奇心をもって観察し、質問し、試すことで物事と概念の知識を身につける。	4. 明確で体系的、論理的かつ批評的な言葉、美しい作品、子どもの健康的な活動、誠実で高貴な行動で物事と概念の知識を表す。
	基本コンピテンシー	基本コンピテンシー
小学5年	3. 1 物語の絵を理解する。	4. 1 物語の絵を描く。
	3. 4 地域の芸術作品を理解する。	4. 4 地域の芸術作品を作る。
小学6年	3. 1 広告を理解する。	4. 1 広告を作る。
	3. 4 彫刻を理解する。	4. 4 彫刻を作る。

*基本コンピテンシーは、1美術、2音楽、3舞踊、4工芸に関するもののうち、1美術と4工芸に関するものだけを掲載した。

表をみてわかる通り、知識と技能のコンピテンシーは対になっている。知識のコアコンピテンシーは、身のまわりの事物や事象を好奇心をもってとらえようとする態度、質問したり試したりすることを通して知識として定着させ、認識を深める資質であるといえる。他方、技能のコアコンピテンシーは、そうした知識や認識を、言語、造形物、活動や行動で表現する資質を指している。両者の基本コンピテンシーは具体的な美術や工芸の活動を踏まえて、学年進行に即して設定されている。

中学校の「芸術文化」では、美術、音楽、舞踊、演劇のそれぞれの科目において知識及び技能のコアコンピテンシーが学年ごとに設定されている。このうち、美術についての知識及び技能のコアコンピテンシーと、それに付随する基本コンピテンシーをまとめると、次表のようになる（表4参照）¹⁹⁾。

中学校の美術文化カリキュラムでは、科目ごとにコアコンピテンシーと基本コンピテンシーが設定されて

表3 インドネシアの中学校「芸術文化」の美術におけるコアコンピテンシーと基本コンピテンシー

	コアコンピテンシー 3 (知識)	コアコンピテンシー 4 (技能)
中学1年	3. 目に見える現象や出来事に関連する科学、技術、芸術、文化に対する好奇心をもって知識（事実、概念、および手順）を身につける。	4. 学校や他の情報源から学んだことに従い、同じ視点・理論に基づいて具体的領域（使用、解析、組合せ、改造、作成）と抽象的領域（書く、読む、計算する、作る）において試し、実行し、表す。

	基本コンピテンシー	基本コンピテンシー
	3. 1 さまざまな材料で動植物や自然物を描くための要素, 原理, 技術, 手順を理解する。	4. 1 動植物, 自然物を描く。
	3. 2 動植物や幾何学的な形を装飾に描くための原理と手順を理解する。	4. 2 動植物, 幾何学的な形の構成を装飾に描く。
	3. 3 人工的な材料に装飾するための手順を理解する。	4. 3 人工的な材料にさまざまな装飾的なモチーフを使って作品を作る。
	3. 4 自然の材料に装飾するための手順を理解する。	4. 4 自然の材料にさまざまな装飾的なモチーフを使って作品を作る。

	コアコンピテンシー 3 (知識)	コアコンピテンシー 4 (技能)
	3. 目に見える現象や出来事に関連する科学, 技術, 芸術, 文化に対する好奇心をもって知識 (事実, 概念, および手順) を身につけ, 使う。	4. 学校や他の情報源から学んだことに従い, 具体的領域 (使用, 解析, 組合せ, 改造, 作成) と抽象的領域 (書く, 読む, 計算する, 描く, 作る) において実行し, 表し, 推測する。
	基本コンピテンシー	基本コンピテンシー
中学 2 年	3. 1 さまざまな材料を使ってモデルを描く要素, 原則, 方法および手順を理解する。	4. 1 観察に基づき, さまざまな材料と技術を使ってモデルを描く。
	3. 2 手描きまたはデジタル技術を使ってイラストを描く手順を理解する。	4. 2 手描きまたはデジタル技術を使ってイラストを描く。
	3. 3 さまざまな技法でポスターを描く手順を理解する。	4. 3 さまざまな材料と技法でポスターを描く。
	3. 4 さまざまな技法で漫画を描く手順を理解する。	4. 4 さまざまなテクニックで漫画を描く。

	コアコンピテンシー 3 (知識)	コアコンピテンシー 4 (技能)
	3. 目に見える現象や出来事に関連する科学, 技術, 芸術, 文化に対する好奇心をもって知識 (事実, 概念, および手順) を身につけ, 使う。	4. 学校や他の情報源から学んだことに従い, 具体的領域 (使用, 解析, 組合せ, 改造, 作成) と抽象的領域 (書く, 読む, 計算する, 描く, 作る) において実行し, 表し, 推測する。
	基本コンピテンシー	基本コンピテンシー
中学 3 年	3. 1 さまざまな材料で絵を描くための要素, 原則, 技術, 手順を理解する。	4. 1 さまざまな材料や技法で絵を描く。
	3. 2 さまざまな材料や技法で彫刻を制作する手順を理解する。	4. 2 さまざまな材料や技法で彫刻作品を作る。
	3. 3 さまざまな材料や技法でグラフィックアートを制作する手順を理解する。	4. 3 さまざまな素材と技法でグラフィック作品を作る。
	3. 4 美術展を開催するための手順を理解する。	4. 4 美術展を開催する。

いる。小学校のカリキュラムと同様に、知識のコアコンピテンシーは、身のまわりの事物や事象をとらえようとする態度と認識の資質であり、技能のコアコンピテンシーはそれらの表現実践の資質といえる。それそれぞれに対応した基本コンピテンシーの内容は、小学校よりも専門的な美術のメディアや技法を伴うものとなっている。

インドネシアの小学校・中学校の美術教育カリキュラムを概観すると、コンピテンシーを基盤とした構造になってはいるものの、21世紀型のスキルとしての創造性が特に強調されているわけではない。むしろ精神的な態度、社会的な態度、知識、技能というコアコンピテンシーの獲得によって、調和のとれた人間形成を目指そうとしていることがわかる。創造性は、そうした調和のとれた人間の資質の一つとして捉えられていると考えられる。

4. まとめ

前章までに、シンガポール、マレーシア、インドネシアの3か国の美術教育カリキュラムについて、その背景となる教育改革の現状と美術教育における創造性育成の状況を概観してきた。

シンガポールでは1990年代後半からの一連の教育改革によって、試験による競争主義からの脱却が図られている。その背景には、知識基盤経済に対応した新たな人材育成をはじめ、社会のグローバル化に対応した資質・能力形成の必要性があった。教育はもとよりシンガポールの社会全体の特徴であった試験の成績による能力主義が段階的に緩和され、21世紀コンピテンシーを踏まえ、個人の価値観を現代の社会的な文脈において生かしていく資質・能力形成が問われるようになった。

こうしたカリキュラムの価値観に照らすと、美術は絵を上手に描くための技術や高尚な趣味や教養ではなく、「人間の生活や思想・感情、価値観に深く関与する表現のモード」と解釈された。美術の価値として、①文化的アイデンティティ、②批判的認識能力とコミュニケーションスキル、③想像力と創造性の拡張、が示されていた。また、美術教育の学習領域との関連では、表現領域（中学校ではコミュニケーション領域）に対応するコンピテンシーとして、「創造する・革新する」コンピテンシーが設定されている。

これらのことから、シンガポールの美術教育における創造性は、狭義には表現物を生み出してコミュニケーションするスキルと志向性ととらえられるが、広義には新たな認識によって生活空間における視覚的な事象を意味づけ、文化的アイデンティティを踏まえて社会との関わりをもととするポジティブな態度と解釈できる。

マレーシアでは2000年代に入ってから、21世紀型の資質・能力開発のための抜本的な教育改革を行っている。「マレーシア教育ブループリント」によって2006年から2010年までの教育施策が示され、現在はこれに続く「マレーシア教育ブループリント2013-2025」が示されている。こうした状況下における現行のカリキュラム改訂のねらいは、考える技術、プロジェクト型の学習課題、ICTへの対応、問題解決、創造力、イノベーションなどを重視したものであった。こうした教育改革を受けて改訂された小学校及び中学校標準カリキュラムでは、「批判的・創造的思考」と「革新性」を兼ね備えた「バランスの取れた人間」が中核に据えられている。したがって、マレーシアの初等中等教育では、求められる人間像の属性である「思考の在り方」として創造性がとらえられているといえる。

マレーシアの美術教育カリキュラムにおける創造性は、小学校では子どもに求める一般的な人間像の属性として意識されているが、中学校では例えばデザインや工芸など、産業や経済に寄与できる資質としての側面が強くなっている。その背景には、知識基盤社会に対応した新しいアイデアやソフトウェアを生み出す人材育成というねらいがうかがえる。したがって、マレーシアの美術教育では、表現技術の学習だけでなく、鑑賞も踏まえて新しいものを創出しようとする総合的な資質形成として創造性育成をとらえているが、中等教育においては徐々に産業に対応した資質としての側面が意識されているといえる。

インドネシアでは、2004年に施行された初等及び中等カリキュラムによって、コンピテンシーを基盤としたカリキュラムの方向性が示され、その後のカリキュラム改革の基本方針となった。OECDによる「キー・コンピテンシー」の発表とほぼ同時期であるから、世界的な教育改革の趨勢を踏まえた改訂であったといえ

る。現在までにカリキュラムは数回の改訂を経ているが、創造力や創造性は、「革新的で生産力・創造力・効率性に優れ、かつ社会・国民・国家・国際社会に貢献できる人間」、「創造性、自律性、協調性、連帯、リーダーシップ、共感力、寛容さ、生活能力」などの資質形成として言及されている。

インドネシアのコンピテンシーの考え方において特徴的なことは、「精神的な態度」、「社会的な態度」、「知識」、「技能」という4つのコアコンピテンシーと、これらの下位におかれた基本コンピテンシーによる階層構造をもつことである。「精神的な態度」と「社会的な態度」のコアコンピテンシーは、小学校、中学校それぞれにおいて各教科共通の目標として示されている。したがって、美術教育の教科の特性を踏まえた資質形成は、「知識」と「技能」のコアコンピテンシーと、そこに含まれる基本コンピテンシーに示されていると考えられるが、「創造性」や「創造力」についての言及は文面上、見当たらない。直接的な言及はないものの、一連のカリキュラム改革経緯を踏まえれば、インドネシアの教育が21世紀スキルの育成を標榜してきたことは明らかである。創造性は4つのコアコンピテンシーの獲得を通して目指される調和のとれた人間像に内包される資質としてとらえられていると考えられる。

これまで述べてきたように、シンガポール、マレーシア、インドネシアにおいて21世紀スキルを踏まえた教育改革が開始されたのは1990年代の後半から2000年前後であり、ほぼ同時期であるといえる。知識基盤社会やグローバル経済という社会的状況は、文字通り地球規模で生じているのであるから、そうした状況に対応した教育の必要性は共通に認識されよう。

教育改革に創造性育成がどのように盛り込まれ、美術教育カリキュラムに現れてくるかという点については、「創造性とイノベーション」あるいは「批判的・創造的思考」という点において一定の共通性が認められた。他方、こうした資質・能力がどのような社会的な文脈で具体化されるかという点については相違が認められた。知識基盤社会における人的資源、多民族・多文化社会における新しいアイデンティティ創出といった観点をもつシンガポールに対して、信仰に基づく精神的・社会的な態度形成と知識・技能獲得の総合的な資質形成の中で実現しようとするインドネシアは対比的であり、その中間にマレーシアが位置づけられるといえる。以上を、美術教育カリキュラムを通して確認された創造性育成に関する共通性と相違としてまとめることができる。

これらは背景としての教育改革を踏まえながら、美術教育カリキュラムの文面とその主旨に基づいた考察である。実際の指導及び授業のレベルで、学校、教師、生徒がどのように美術教育における創造性の育成・開発を意識しているかは、現地での取材・調査を必要とする。筆者は1990年代後半から2010年代前半までは、現地の学校、教師、教育省、教員養成機関における取材・調査を実施しているが、現時点における状況については今後の現地調査を要する。この点については今後の継続課題とする。

注

- 1) 福田・小平・佐々木による「東南アジアにおける美術教育カリキュラム基礎調査研究：マレーシア、シンガポール、インドネシアの事例」(1998～2000年度科学研究費、基盤研究B、10041075)、福田・佐々木・上原による「アジア地域における美術教育課程の実質化調査研究」(2008～2011年度科学研究費、基盤研究C、20530826)、佐々木・福田・中西による「アジアの芸術教育における西洋の影響と独自性の形成に関する研究」(2012～2014年度、科学研究費、基盤研究C、24531091)において確認された。
- 2) Symaco, Lorraine Pe. (ed.), *Education in South-East Asia*, Bloomsbury, 2013.
- 3) 松尾知明、「21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革」、『国立教育政策研究所紀要』、第146集、2017、pp.9-22.
- 4) ATC21Sが示した21世紀スキルには、「創造性とイノベーション」、「批判的思考・問題解決・意思決定」、「メタ認知(認

- 知プロセスの知識)」、「情報リテラシー」、「ITCリテラシー」、「コミュニケーション」、「コラボレーション (チームワーク)」、「ローカル・グローバルなシティズンシップ」、「人生とキャリア設計」、「個人的・社会的責任」などのスキルが示されている。
- 5) Tan, Jason. (ed.), *Education in Singapore*, Pearson Education South Asia, 2012.
- 6) 佐々木宰, 「シンガポールの中高等教育改革と改訂シラバス: 下等及び上等中学校用美術シラバスの事例」, 『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』, 第71巻第1号, 2020, pp.339-351.
- 7) Student Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Primary One to Six, Implementation starting with 2018 Primary One Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2018. で示されている図をもとに, 佐々木が和訳し, 一部説明を加えて作成した。
- 8) 前掲7) のシラバス及びStudent Development Curriculum Division, *Art Syllabus: Lower Secondary, Implementation starting with 2018 Secondary One Cohort*, Ministry of Education Singapore, 2018.
- 9) 佐々木宰, 中西紗織, 福田隆眞, 「シンガポールの芸術振興政策と芸術教育: School of Arts Singaporeの事例」, 『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』, 第65巻第1号, 2014, pp.73-88.
- 10) Ministry of Education Malaysia, *Malaysia Education Blueprint 2013-2025: Preschool to Post-Secondary Education*, Kementerian Pendidikan Malaysia, 2013.
- 11) Bahagian Pembangunan Kurikulum, *Kurikulum Standard Sekolah Rendah, Pendidikan Seni Visual, Dokumen Standard Kurikulum dan Pentaksiran, Tahun 5*, Kementerian Pendidikan Malaysia, 2019. に掲載の図を和訳して作成した。
- 12) 前掲11), p.2.
- 13) Bahagian Pembangunan Kurikulum, *Kurikulum Standard Sekolah Menengah, Pendidikan Seni Visual, Dokumen Standard Kurikulum dan Pentaksiran, Tingkatan 3*, Kementerian Pendidikan Malaysia, 2017.
- 14) OECD/ADB, *Education in Indonesia: Rising to the Challenge, Reviews of National Policies for Education*, OECD Publishing, Paris, 2015, (<https://doi.org/10.1787/9789264230750-en>).
- 15) 松本剛次, 「インドネシアの中高等教育改革がめざす『能力 (コンピテンシー)』とその育成」, 『日本語教育』, 158号, 2014, pp.97-111.
- 16) 古内綾子, 三本智哉, 五十嵐裕佳, 八田直美, エフィ・ルシアナ, 「インドネシア国家カリキュラム準拠高校教科書『にほんご☆キラキラ』の開発: 態度面のコンピテンシーの育成と日本語学習の統合を目指して」, 『国際交流基金日本語教育紀要』, 第13号, 2017, pp.87-100.
- 17) Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan, Republik Indonesia Nomor 37 Tahun 2018 tentang Perubahan atas Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan Nomor 24 Tahun 2016 tentang Kompetensi Inti dan Kompetensi dasar Perajaran pada Kurikulum 2013 pada Pendidikan Dasar dan Pendidikan Menengah (初等中等教育の2013年カリキュラムにおける教育のコアコンピテンシーと基本コンピテンシーの規則改正に関するインドネシア共和国教育文化省規則2016年第24号を改正するインドネシア共和国教育文化省規則2018年の規則第37号)
- 18) 30. Kompetensi Inti dan Kompetensi Dasar Seni Budaya dan Prakarya SD/MI, 前掲17), pp.243-248, を参照して和訳し, 再構成した。
- 19) 38. Kompetensi Inti dan Kompetensi Dasar Seni Budaya SMP/MTs, 前掲17), pp.302-319, を参照して和訳し, 再構成した。

参考文献

- ・村田翼夫 (編), 『東南アジアの教育モデル構築: 南南教育協力への適用』, 学術研究出版, 2018.
- ・森山幹弘, 「インドネシアと日本の人格形成教育の比較: 西ジャワ・スダ地方を中心に」, 『南山大学紀要「アカデミア」人文・自然科学編』, 第10号, 2015, pp.75-92.
- ・Heyward, Mark., Sopantini., Indonesia: The Challenges of Quality and Equity in Educaiton, Symaco, Lorraine Pe. (ed.), *Education in South-East Asia*, Bloomsbury, 2013, pp.71-93.

謝 辞

本研究はJSPS科研費20K02784の助成を受けたものです。

Acknowledgement

This research was supported by a grant from JSPS KAKENHI Grant Number 20K02784.

(佐々木 宰 釧路校教授)

(福田 隆眞 山口大学名誉教授)

